

季刊

博物館だより

FUKUSHIMA MUSEUM
QUARTERLY

66

収蔵資料品展

ふるさとの

玩具たち

福島県立博物館



「根子町人形」

秋の收藏資料品展

ふるわしの玩具たち

会期 平成14年10月26日(土)～12月1日(日)



「土湯こけし」

展覧会へのおさそい

玩具とはもちろん子どもたちが大好きなおもちゃのことです。でもここで「ふるわし」ということばを付け加えたのは、いわゆる「郷土玩具」を考えたことです。

郷土玩具というと何を思い起こすでしょうか。地方地方で特徴的なおもちゃや、神社・寺院の祭りなどで配ったり売ったりされる縁起物。それから趣味の置物といったものもあるようですから、ここでの「郷土玩具」は広い意味での「玩具」となるのです。ですからことばの意味そのもののおもちゃということだけではないのです。

そしてこの「郷土玩具」は多くの愛好者を生み出したのでした。今回の展覧会の元になったのもそんな愛好者の残したコレクションです。

実は、「郷土玩具」ということばが用いられるようになったのはそんなに古いことではないのです。現在この名で呼ばれているもの自体は江戸時代以来作られるようになってきたのです。しかし、大正時代に「郷土玩具」という名称が誕生するまでは「大供玩具」「土俗玩具」と呼ばれていたのです。つまり、大正・昭和と江戸の香りが消えようとする近代に生きた人々が、都市の視点から地方を見ると、近代の視点から近世の遺物を見るとときに使った「考え方」でした。

もちろん、そんな難しげなことをあれこれ気にしなくても大丈夫。福島県内をはじめ、全国の「郷土玩具」たちが迎えてくれます。初めて出会うのどこか懐かしい不思議なモノの数々。深まり行く秋のひと時を過ごすのに最適の空間を創り出してくれます。

コレクションの誕生

コレクターと呼ばれる人々はいつの時代にも他の人には理解しがたい情熱を持って収集に熱中するものです。今回の展覧会を構成する主要コレクション「大竹コレクション」を作り上げた大竹正三郎さんもそんな一人でした。福島大学で教育学を教えるかたわら、郷土玩具を集めていました。そのコレクションの中心はこけし。このほかいわゆる玩具からは外れるわらじや蓑、籠などの民具も収集品目に入っていました。



「三春人形」



「三春駒」

幻の人形 根子町人形

福島市清水町（旧称根子町）で江戸期から明治にかけて作られていた人形です。仙台の堤人形の人形師により始められたという伝承があり色合いなど共通する部分もあります。真新しいものとは異なり、古色のついた土人形には独特の魅力があります。



「根子町人形 敦盛」

展示の構成

ようこそ展覧会へ

福島県の郷土玩具

三春人形 土湯こけし 白河だるま 久之浜人形 天神様 根子町人形

全国の玩具たち

全国各地を代表する玩具を集めました。

青森県・下川原土人形 秋田県・イタヤ細工 岩手県・ちやくちやく馬
 こ 山形県・相良人形 宮城県・遠刈田こけし 東京都・ずぼんぼ 千
 葉県・下総土人形 山梨県・竜神招福 新潟県・三角だるま 愛知県・
 餅つきうさぎ 京都府・伏見人形 奈良県・手向山神社の立ち絵馬 三
 重県・大入道 岡山県・素隠居 山口県・金魚提灯 香川県・奉公さん
 長崎県・古賀人形 宮崎県・のぼり猿 熊本県・木の葉猿 鹿児島県・
 鯛車

収蔵資料品展《ふるさとの玩具たち》は平成一四年一〇月一六日（土）から二月一日（日）まで開催しています。
 観覧料 常設展観覧料でご覧いただけます。

講演要旨 企画展記念講演会

平成十四年八月一日(日)
平成十四年八月二日(土)
平成十四年九月七日(土)

友の会主催講演会「戦国の画僧雪村と会津・常陸」
福島民報社主催講演会「禅僧としての雪村」
講演会「雪村の夢 仙人の夢」

講師	東京学芸大学教授	小川 知二氏
講師	福聚寺副住職・作家	玄侑 宗久氏
講師	明治学院大学教授	山下 裕二氏
講師	イラストレーター・作家	山下 伸坊氏
講師	明治学院大学教授	山下 裕二氏

「雪村展」では雪村の魅力を十分に味わっていただくため会期中に三回の講演会を行いました。

一回目は友の会主催による東京学芸大学教授小川知二先生の「戦国の画僧雪村と会津・常陸」。雪村研究の第一人者である先生には会津での講演ということでも雪村と会津の結び付きについて研究成果を詳しくお話いただきました。雪村について詳しく知りたいという方にも十分満足いただけたものと思います。

二回目は玄侑宗久氏の講演「禅僧としての雪村」。講演後は本展監修者の山下裕二先生との対談がありました。玄侑氏は雪村が晩年を過ごし創作活動を行った三春にある福聚寺の副住職。昨年芥川賞を受賞され小説家としても活躍です。三春に暮らす禅僧であり小説家としての違いはありますが、同じ表現者として雪村との共通点の多い玄侑氏の講演は大変好評で、当日は満席で入りきれないお客様が多く出るほどでした。

三回目は山下氏と南伸坊氏のトーク「雪村の夢 仙人の夢」。南氏はイラストに装丁に著述にと多彩な分野で活躍中ですが、中国の仙人がお好きで、仙人をテーマにしたマンガ作品も出しています。雪村も仙人をテーマに多くの作品を描いており、仙人をキーワードに雪村の絵を語っていただきました。

小川知二氏講演「戦国の画僧雪村と会津・常陸」

雪村の会津来訪について先生は三春の福聚寺を開いた復庵宗己とのつながりを指摘されました。復庵は会津の

実相寺も開いており、復庵の足跡を辿って雪村は会津を訪れたのではないかと、復庵の在野的な姿勢が雪村を引きつけたのではないかとのことでした。また会津の



筆名盛氏、金剛寺や興徳寺との関係に触れ、雪洞ら雪村の弟子たちから会津と雪村の関係を探ることもできるのではないかと指摘は雪村研究の一つの切り口を示されたものと思います。

その他、スライドを使用して雪村の初期作品「滝見観音図」の童子と「宝塔を拝む観音」の観音の姿を比較し、両者の顔を真上に向けて共通のポーズから、最も初期の作品にすでに雪村の造形的特徴が表れていることを指摘されました。ここでは紹介しきれない充実した内容の講演でした。友の会で講演録を発行する予定です。是非こちらも読み下さい。

玄侑宗久氏講演「禅僧としての雪村」

玄侑氏は雪村が道教に深い関心を寄せていたとの説を「気」の実演を交えて語りました。雪村の描く龍虎は自

然界のエネルギ―の象徴で山水図も雪村が描くと「気」に満ちた仙界となる。雪村独自の粘り気のある水の表現は水に「気」がこもっていることを示している。また雪村が過ごした雪村庵は風水の考え方では実に理想的な地にあるとの説は、雪村作品の鑑賞に大変役立つものでした。

講演後の山下先生との対談では、雪村は絵で玄侑氏は文章で、自分が表現せずにはいられない世界を表現している。玄侑氏と雪村は本当に似ているのではとの話が印象的でした。

南伸坊氏・山下裕二氏トーク「雪村の夢 仙人の夢」

南氏と山下氏のトークでは軽妙な語りうちに、雪村の絵を見る楽しさが伝わってきました。仙人を描いた南氏のマンガ、江戸時代の奇才曾我蕭白の作品、そして雪村の作品。それぞれの仙人図を見ながらトークは進みましました。拡大図を交えたスライドの映写と息の合ったトークに会場は和やかな雰囲気包まれていました。



伊達政宗黒印状

高橋 充 歴史担当

今回紹介する「伊達政宗黒印状」は、二〇〇〇年度に当館が購入した新収蔵資料である。伊達政宗の発給文書については、『仙台市史 伊達政宗文書1』が天正十九年以前のもを集大成しているが、この黒印状は、その刊行後に見つかったものである。

まず、全文の読みを以下に示す（写真参照）。

すけのさは之村

一、たいら在家年具

五貫文之所下置

候、仍如件

天正十四年成兩

九月五日（黒印 印文「政宗」）

安斎雅楽助とのへ

形態は折紙で、紙質は茶色味がかつた薄手の楮紙様。法量は縦三四・五、横四六・五（㎞）。右筆書と判断される。内容は、天正十四年（一五八六）九月五日、伊達政宗が、「安斎雅楽助」なる人物に「すけのさは之村」の内の「たいら在家年具（貫）五貫文」の地を宛て行うというものである。「すけのさは之村」（普之沢村）は、現在の福島県安達郡岩代町杉沢に比定される。岩代町の中でも南の三春町寄りに位置する。

この地域は中世には「塩松」と呼ばれ、小浜城主大内定綱が治めていた。この前年の九月に、政宗は定綱を破って小浜城に入り、塩松を占領した。敗れた定綱は二本松に逃れた。その後、伊達氏と二本松島山氏の間では伊達輝宗の死去、人取橋の合戦、二本松城落城と事態が劇的に展開する。それらが一段落した天正十四年八月頃、政宗は塩松領を白石宗実に委ね米沢へ帰った。そして大

内攻めの功を賞し、塩松領の知行配分を決定した。この黒印状は、塩松領の知行地確定の一環として発給されたものと位置づけることができる。



これと同じ日付けで、同じような黒印状がいくつか存在する。原本として残っているものでは、安斎佐藤系もん宛て（岩代町 安斎徳家文書）、安斎八郎さへもん宛て（岩代町 安斎新一郎家文書）、本田平二さへもん宛て（三春町 平沢家文書）、黒沢新介宛て（斎藤報恩会所蔵文書）があり、その他に『松藩搜古』所収の写本が二点ある。いずれも塩松に知行地を宛て行うという趣旨である。「安斎雅楽助」は、の宛所となつている安斎氏と何らかの縁がある者かもしれない。このように、塩松領の知行宛行のために、この日には一斉に黒印状が発給されたのである。そのうちの一通が今回紹介したものであり、同じようなものは今後も見つかるかもしれない。これらの黒印状は、いずれも折紙（ただし、は下部裁断）で、署名（自書）はなく印文「政宗」の黒印を捺すという書式が共通している。いちいちの署名を省略し、印文「政宗」の黒印のみを据えているのは、略式であり、相手の地位が低いことにもよるが、一斉に

大量発給されたことにも関係がありそうである。

ところで、この印文「政宗」の印章は、今のところ九月五日の一斉発給のものと、同年七月（朱印）と十月に一例ずつしか確認されていない。政宗の生涯の中では、ほんのわずかな期間だけに使用されたものらしい。政宗が知行宛行状などに使用した印判としては、印文「龍納」の朱印のほうがよく知られている。こちらのほうが使用期間もずっと長く、残存する印判状もかなり多い。この「龍納」朱印の場合も、確実なものは天正十四年八月頃から使用が確認できる。つまり天正十四年の時点で、政宗は少なくとも二種類の印判を使用し、一方は短期間で廃止させ、もう一方は、後々まで使いつづけるようになったということになる。廃止された理由はよくわからな



Q: 鶴ヶ城には、どれくらいの野鳥がいるのですか。
 A: 私個人の観察では、一九九二年から二〇〇一年までの七九〇回の観察で九四種を確認しています。一年間では、平均五九種ほど確認することができます。一〇年間で一番多く確認した月は、一二月で総数六一種です。年平均でも三四種確認できます。一番少ない月は六月と八月で総数二八種です。年平均では八月が一五種と最も少ないです。これは、冬季が、木々に葉がなく確認しやすいことと、カモ等の冬鳥たちが渡ってきて、濼等がにぎやかになるためです。夏季は葉が繁り、確認が困難になることと繁殖期のため、野山に鳥が分散しているためと思われる。また、私の観察は、ウグイスのさえずり以外、声だけでは確認数に含めていないためもあります。

鶴ヶ城の野鳥

Q: 鶴ヶ城で、一番よく見ることのできる野鳥はなんですか。
 A: カルガモで九八%の確率で見ることができます。二位以下、一〇位までは、スズメ八一%、ヒヨドリ七九%、ハシボソガラス七三%、コイサギ六八%、トビ六八%、シジュウカラ五五%、コガモ五四%、カワラヒワ五四%、マガモ五〇%の順です。コガモとマガモは冬鳥ですから、冬季はかなりの確率で見ることができます。

さて、一番よく見るカルガモですが、カモでは珍しく渡りをせず、一年中見ることができ、鶴ヶ城でも繁殖します。同じく渡りをしないカモにオシドリがありますが、二〇〇二年の六月にヒナをつれているメスを確認しました。

カルガモは雌雄同色で繁殖期には、鶴ヶ城では、数が少なくなります。冬季に数が多くなるのは、狩猟期でハシボソに撃たれる心配がないからでしょう。鶴ヶ城では人が与える餌に寄ってきますが、他の地域ではどちらかといえば警戒心が強いです。東京の都心部の人工池で繁殖して話題になり、すっかり人気者になりました。これは、人がいる所で繁殖することにより、カラスやヘビなどの天敵からヒナを守るためでしょう。
 Q: 野鳥を見るには、どのようにすればいいのですか。
 A: 手ぶれしない軽い七〜八倍の双眼鏡を使うのがいいでしょう。服装も鳥を驚かさなない地味なものがいいでしょう。大切なことは、野鳥の生活の邪魔をしないことです。無理に鳥に近づこうとしても、警戒心の強い鳥は飛

Q & A

回答者
 自然担当
 古川裕司

んでいってしまいます。場所によっては、鳥に近づける所があります。鶴ヶ城ではカルガモ、上野の不忍池では、カモ類やカイツブリ、バン等、京都の鴨川ではアオサギ、ダイサギ、コサギというように間近に接することのできる場所があります。そういう所では、野鳥と人間の距離が短い、いい関係ができていくでしょう。

一二月一日に自然史講座「バードウォッチング」を鶴ヶ城で行いますので参加して下さい。一二月に五〇%以上の確率で見ることのできる鳥は、コイサギ(六四%)、マガモ(九五%)、カルガモ(一〇〇%)、コガモ(九一%)、オカヨシガモ(八〇%)、オナガガモ(九七%)、トビ(七〇%)、カワセミ(五八%)、ヒヨドリ(九九%)、シジュウカラ(六七%)、カワラヒワ(五四%)、スズメ



シジュウカラ



カルガモ

(七一%)、ハシボソガラス(七五%)です。これらの鳥たちに出会えるかもしれません。

トピックス

移動博物館「武家のこころ・かたち」の開催
 当館では昨年度まで、県内各地におじゃまし、さまざまな内容で移動講座を行ってきましたが、今年度は、当館の収蔵資料をより多くの皆さんにご覧いただくため、「移動博物館」を開催することになりました。白河市教育委員会にご協力いただき小峰城敷地内にある集古苑を会場とします。テーマは「武家のこころ・かたち」。神仏への祈りや、政治の中の厳しさ、芸事で見せる遊び心など、武将たちの「こころ」を伝える「かたち」あるものをご紹介します。白河市歴史民俗資料館の収蔵品もあわせて展示することとなり、白河らしさもある内容となりました。

芸術・文化の秋。是非ご来場ください。

会場 白河集古苑(白河市郭内一の七三)
 会期 平成一四年一〇月二二日(土)
 一〇月二七日(日)

展示資料

銅鉢(重文・八槻都々古別神社蔵)
 犬追物図屏風(福島県立博物館蔵)
 草花螺鈿洋櫃(福島県立博物館蔵)
 豊臣秀吉朱印状(福島県立博物館蔵)
 など約四〇件

観覧料

一般・大学生 三二〇円(二五〇円)
 小・中・高校生 一〇〇円(八〇円)

()は二〇名以上の団体料金

*ただし一〇月一九日~二二日までの「ねんりんピック」開催期間中は無料

休館日 一〇月二五日、二八日、十一月五日、一二日
 ギャラリートーク

日時 一〇月二四日(月)午後一時半~
 十一月三日(日)午後一時半~

場所 白河集古苑展示室
 講師 福島県立博物館学芸員



冬の収蔵資料品展予告

「長井前ノ山古墳と 周辺の遺跡」

長井前ノ山古墳は、河沼郡会津坂下町にある五世紀につくられた前方後円墳です。福島県立博物館は、平成一〇年からこの古墳の調査をおこなってきました。

これまでの発掘調査によって、この古墳の形・大きさ・構造がほぼ明らかになりました。後円部中央からは遺体を納めた石棺を検出しましたが、残念ながら中世に石棺が開けられたため副葬品などはほとんど出土しませんでした。この石棺は、天井(蓋)石が家の屋根のような形態をとることから、「合掌形石室」と呼ばれており、福島県内でははじめて確認されました。また、古墳上には中世の経塚とみられる施設がつけられており、内部から密教に關係する仏具が出土しています。

今回の展示では、長井前ノ山古墳の調査成果を中心に、関連する周辺の遺跡や遺物をあわせて取り上げ、この古墳のもつ意味を明らかにすると同時に、会津盆地の古墳時代の最新の研究成果を紹介いたします。



長井前ノ山古墳の「合掌形石室」

冬の収蔵資料品展「長井前ノ山古墳と周辺の遺跡」は平成一五年二月一日(土)から三月三日(日)まで 観覧料 常設展観覧料でご覧いただけます。

常設展示室「歴史・美術」テーマ展示

「歌舞伎衣裳展」

会期 一〇月八日(火)から二月一日(日)まで

「画題で見る美術 唐人物」

会期 二月一〇日(火)から二月二十六日(日)まで

講演・講座

実技講座

「うるしの技に挑戦」

講師 伝統工芸士 大沢周一さん

会津短期大学教授 須藤紀雄さん

(十一月五日のみ)

日時 一〇月 六日(日)午後一時半

一〇月二〇日(日)午後一時半

十一月 五日(火)午後一時半

(ハイテクプラザ等)

十一月二四日(日)午後一時半

二月 八日(日)午後一時半

二月二二日(日)午後一時半

「麻糸作り」

講師 当館学芸員 榎 陽介

日時 一〇月一九日(土)午後二時

「古文書入門7 近世」

講師 当館学芸員 酒井耕造

日時 一〇月二六日(土)午後二時

「古文書入門8 近世」

講師 当館学芸員 酒井耕造

日時 十一月三〇日(土)午後二時

「古文書入門9 中世」

講師 当館学芸員 高橋 充

日時 二月一四日(土)午後二時

「わらぞうりをつくろう」

講師 技術伝承者 鈴木幸雄さん

日時 二月九日(土)午前二時

「博物館を探検しよう」

講師 当館学芸員 田中 敏

日時 二月三日(土) 勤労感謝の日)

午後一時半

考古学講座

「福島の旧石器時代」

講師 当館学芸員 藤原妃敏

日時 一〇月二七日(日)午後一時半

展示解説員講座

「博物館で遊ぶ」(仮称)

講師 当館展示解説員

日時 十一月二日(土)午後一時半(予定)

「おもちゃをつくろう」

講師 当館展示解説員

日時 二月七日(土)午後一時半

美術講座

「福島の仏像 28」

講師 当館学芸員 若林 繁

日時 二月二六日(土)午後一時半

保存科学講座

「保存科学の世界」

講師 当館学芸員 松田隆嗣

日時 一〇月二二日(土)午後一時半

自然史講座

「ハードウオッチング」(鶴ヶ城周辺)

講師 当館学芸員 古川裕司

日時 二月一日(日)午後一時半

民俗講座

「青年会の民俗誌」

講師 当館学芸員 猪巻 恵

日時 二月三日(月) 天皇誕生日)

午後二時

金曜講座

場所 講堂 入場無料

郷土学習学而篇 地方の時代の地方学習

第三回

「塔寺八幡長帳不思議学習」

日時 一〇月二一日(金)午後一時半

第一四回

「蒲生氏郷 一つのふくしま」

日時 一〇月二五日(金)午後一時半

第一五回

「藩の数だけの県といふこと」

日時 十一月八日(金)午後一時半

第一六回

「ならぬことはならぬ 会津藩」

日時 十一月二二日(金)午後一時半

第一七回

「下民易虐 上天難欺 戒石銘」

日時 二月二三日(金)午後一時半

第一八回

「この主この臣 白河藩」

日時 二月二七日(金)午後一時半

実演

場所 体験学習室 入場無料

「紙しばい」

講師 紙しばい作家 五十嵐邦子さん

日時 一〇月二三日(日)

「昔語り」

語り部 山田登志美さん

日時 十一月二七日(日)

語り部 横山幸子さん

日時 二月二日(日)

「注連飾りづくり」

技術伝承者 榊原源隆さん

日時 二月二五日(日)

伝統技術実演

「白河のだるまつり」

技術伝承者 渡辺恭助さん

日時 二月三日(日) 文化の日)午後一時半

* 開始時間の書いていない実演は、午前十時半からと午後一時からの二回行われます。

常設展無料開放日

十一月三日(文化の日)

* 小・中学生、高校生は、学校が休みの日は、常設展示室が無料開放されます。

一〇・二月の休館日

一〇月 七日(月)・一五日(火)・二八日(月)

十一月 五日(火)・一一日(月)・一八日(月)

・二五日(月)

二月 二日(月)・九日(月)・一六日(月)・

二四日(火)

年末年始

二月二八日(土)・一月四日(土)